他者とともに編む(初年度)

≈他者とともに編む子供の様相を探る≈



公開授業研修会(R7.5~7月)を通して、「他者とともに編む」における子供の姿をより詳細に 捉えることができました。成果として、上図の「自己決定・自己選択する姿」「見直す姿」「求める姿」 「揺らぐ姿」「承認・共感・認め合う姿」を見いだしました。本研究会では、授業者がこれら5つのカ テゴリーの中から一項目を選択し、その項目を窓口とした「他者とともに編む」姿を提案します。

本資料では、それぞれの授業者がどの姿に焦点を当てて仮説を立て、授業を行うかをお伝えします。 当日は、忌憚のないご意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

国語科①〈公開授業 I 〉

- 1. 授業者 神田 靖大
- 2. 単元名 なりきって よもう「たぬきの糸車」
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

④他者と関わり生まれる問題意識によって、子供の内面は揺らぎ、相互に変容していく

「他者とともに編む」子供は、「揺らぎながら相互変容する子供」であると考える。「揺らぐ」とは、他者との関わりによって子供が問題意識をもち、悩んだり迷ったりしながらも判断しようとすることである。「相互変容する」とは、問題意識をもった子供が、再び同じ他者や、違う他者に関わりを求め、学びのヒントを得ながら、自分にとって最適な学びに調整していく様相のことであり、それは、ともに関わる他者も同様で、揺らぎ、関わりを求め、最適な学びに調整していくということである。したがって国語科では、言語活動の中に、他者と関わり問題意識が生まれる場を意図的に設定し、言葉の意味の認識を更新できるようにすることで、子供は他者とともに編むと考える。

本実践では、自分の読みを表現、交流し、よりよい表現を模索する中で、相互に変容する姿を願う。そこで、「登場人物になりきって演じる」という言語活動を軸に単元を構成する。登場人物になりきるためには、教材文を繰り返し読み、登場人物の行動の理由を想像して、動きや表情、口調を考える場が必要になる。しかし、本単元における「演じる」ことは、このように念入りな用意をすることに留まらない。それは、子供が「演技プランを用意しないこともある」ということである。つまり、他者との即興的なやり取りによって生み出される相互作用によって作り出された物語の世界を経験し、想像の具体性を高めていくのである。演技プランは用意しないというものの、子供は教材文を繰り返し読めば何かしら考えはもつだろう。その考えを即興的に表現する場を設定することで、子供は揺らぎながら自分の考えを表現したり、相手の表現に対して揺らぎながら応答したり、応答したその表現を見直したりする。相互に作用し、変容していくそのやり取りは、完成されたものは求められない。むしろ、そのやり取りがまた別の他者へと波及していくような場となるよう子供同士をつなぐことが重要である。そうして、自分たちの読みが構成されていく。このような学びの姿が「他者とともに編む」である。

国語科②〈公開授業 I 〉

- 1. 授業者 中村 健志
- 2. 単元名 組み立てを考えて、お話を書こう「お話のさくしゃになろう」 with「スイミー」 (お話のさくしゃになろう:「光村図書 こくご ニ下」、スイミー:「光村図書 こくご ニ上」)
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

⑤ 友達の工夫のよさを共感的に理解し、自分の物語への適用を図る

他者との関わりによって、子供は大小様々な問題意識をもつ。その問題意識をもって、子供は再び同じ他者や、前と違う他者に関わりを求め、学びのヒントを得ながら、自分にとって最適な学びに調整していく。よって、国語科では、言語活動の中に子供が問題意識をもつ場や、他者と関わりたくなる場を設定し、言葉の意味の認識を更新できるようにすることで、子供は他者とともに編むと考える。

本実践であれば、「書き方の技のよさ」について伝え合う活動を第1次と第2次に行う(本実践では、子供に伝わりやすいように修辞技法のことを書き方の技と呼ぶこととする)。

第1次では、単元の導入のため物語の創作を行う言語活動と伝える対象を具体的に提示し、「素敵なお話になる書き方の技のよさを考えよう」という単元を通して追究する学習課題を設定する。子供たちは1年生の頃から国語用語の一部として書き方の技を学習してきた(例を挙げると、「やくそく」では情景、「くじらぐも」では反復、「スイミー」では倒置法を、それぞれ学習してきた)。そういった経緯があるため、既習の教材文を想起することで、これまで関心を寄せてきた作者や訳者のように「書き方の技を使って物語を書いてみたい」という追究意欲は高まるだろう。学習計画を立てる際には、子供の追究意欲を大事にし、書き方の技の運用方法と効果を学ぶ活動や、これまで学習してきた「読むこと」の教材文との比べ読みの活動等を柔軟に計画していきたい。

第2次では、学習計画に沿って比喩や倒置法といった修辞技法を用いた書き方と効果について学習する。また、これまで子供たちが情景」や「倒置法」を学習するきっかけとなった既習教材「やくそく」「スイミー」との比べ読みも子供の追究意欲に沿うように行う。「初めー中ー終わり」という文章構成に着目した上で、物語のどこに、どのような修辞技法が用いられていて、どのような効果があるのか考えることにより、「書き方の技」に関する捉えは多岐に渡ることだろう。

さらに、「お話のさくしゃになろう」教材文にある「〈初め〉木の実を探しに出かける2匹のねずみ、〈中〉空欄、〈終わり〉夕焼け空を背景に手を振る2匹のねずみ」という3枚の絵を基に、初めと終わりに合うように空欄部分の「中」の展開を考えて書く学習を行う(初めと終わり部分は、絵に応じたものであれば書きぶりは自由とする)。その際、これまで学習した修辞技法を書き方の技として取り入れて書き始めると、「初め一中一終わり」のどこにどのような修辞技法を使って書くかは各自の判断に委ねられる。

そうして各自が仕上げた物語の書き方の技について伝え合う活動を行うと、空欄部分である「中」の部分に修辞技法を用いて工夫する子供が多く見られるだろう。これは、「中」が物語における中心部分であり、登場人物の行動や行動理由(気持ち)を詳しく書く必要があるという考えが基になっている。一方で、「やくそく」や「スイミー」との比べ読みの経験から、絵としては共通している「初め」や「終わり」に修辞技法を用いて工夫する子供も見られると考えられる。

その際、共感という非認知能力を日頃から学級風土として重視していることや、「初め」「終わり」を工夫することの効果を全体で吟味し、理解する場をもつことにより、子供の中では構成に着目しながら修辞技法を使った書き方に関する認識が更新されていくのである。そうして友達の工夫のよさを共感的に理解した子供は、自分の物語への書き方の技の適用を図ったり(推敲)、他の物語を書く際に学びを転移しようと自己選択・自己決定したりするだろう。そのため、教師の見取りや評価は、親和性のある考えに触れた時や、新たな視点を得た時から自己選択・自己決定の場までに着目して行う必要がある。

算数科①〈公開授業Ⅱ〉

- 1. 授業者 羽柴 直子
- 2. 単元名 まるい形を調べよう
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

② 既習事項を根拠に、円に対する捉えを見直す子供

円の約束を調べ、性質を見いだし、半径の長さが分かれば円が作図できることを学んだ子供たちは、いよいよ模様の作図に挑戦する。そこで一番知りたいのは半径の長さであるため、長さを測定するだろう。ただ、子供たちが測定している円には中心の場所が書かれていないため、そのままでは正確な半径の長さを求めることはできない。早く模様を作図したい子供たちは、自分が測定した値が正確な半径の長さではないことに気付かないだろう。そこで、調べた半径の長さが何cmになったか出し合う場を設定する。同じ大きさの円なのだから、当然同じ値になるはずなのに、異なる値になった事実と出合った子供たちは立ち止まり、自分の取り組みに見直しをかけ始める。さらに、どうして異なる値になったのだろうかと、友達の取り組みが気になり、関わりを求め始める。そうして、測定した場所に線を引いて比較したり、実際に測定している様子を見合ったりすることで、正確な半径を測ることができていないことに気付くだろう。

「何に困っているのか」「何がわかれば円が描けるのか」「どうしたら中心が分かるのか」「本当に中心だと言えるのか」「どうしてそのように考えたのか」「どのようにして考えたのか」という視点で、根拠をもって子供たちは話し合い、明らかにしていくことで、論理的に問題を解決していく考え方が子供たちの中に意識付くことを大切にしていく。

算数科②〈公開授業 I〉

- 1. 授業者 神田 将義
- 2. 単元名 数をどのようにとらえるのか ~かけ算~
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

⑤ 共感性を発揮し、相互依存的な関係性の中で学び合う子供

本実践において「他者とともに編む」とは、ただ他者と関わったり考えを交流したりするような表面的な関わりを指すものではない。他者が考える解き方の理由やその解き方を選択した想いにまで入り込むような、より深い"共感性"を発揮して関わるような様相を指す。

また、本実践では多様な見方で事象を捉えていくことが求められる。1時間の授業の中で、一人で多様な考えをもち、それぞれの考え方の特徴を捉え、比較・検討していくなど、低学年の子供ではまずできることではない。子供たちは他者を頼り、"相互依存的"な関係の中で学んでいくことが不可欠になってくる。

「他者とともに編む」には、このような子供の"非認知能力"(本実践においては"共感性"や"相互依存的な関係性"といった部分)が大きく関わってくる。

そのようなことから、子供たちが「他者とともに編む」ことで学びを深めていけるような場づくりが教師の大きな役割となるだろう。算数科において、場づくりにはいくつかの働きかけの仕方があると考える。一つ目に、学習問題の提示の仕方が挙げられる。「 3×2 の答えは?」と問うという極端な例を基に説明したい。この問い方でいくと、子供たちは「6」としか答えようがない。これだと、多様でもなければ考える余地もないだろう。他者に"共感"する必要もなければ、"相互依存的"に学ぶ必要もない。そういったことから、学習問題に"しかけ"を施し、非認知能力を発揮しながら学べるような場づくりを心掛けたい。二つ目に、子供たち同士の対話を重視した学び合いを重視することが挙げられる。教師の問いかけに対して子供たちが応答していくような一問一答型のやり取りではなく、子供たちの発言に対して子供たちが応答していくような学び合いになる教師の"居方"を大切にしたい。三つ目に、"自分らしく学ぶ"ことができる場であることが挙げられる。「数直線で考えたいな」「 \bigcirc さんと一緒に考えたいな」「 \bigcirc さんはどう考えているのかな」といった子供たち一人一人の想いを実現できる場にするために、ペアやグループの活動の時間の確保やグルーピングの仕方を子供の意見を取り入れながら柔軟に行うなど、子供の視点に立った場づくりを意識したい。

このように、「他者とともに編む」子供を引き出し、よりよく学ぶ子供たちの姿から、「他者とともに編む」子供の様相を探っていくこととする。

社会科①〈公開授業Ⅱ〉

- 1. 授業者 高田 真光
- 2. 単元名 火事からくらしを守る
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

① これまでの学びを他者とともに編みながら自己選択・自己決定を繰り返す子供

本実践において「他者とともに編む」とは、調べ学習や友達との話合い活動を行い、それらを通して得た知識や考えを用いて、問いに対する自分なりの答えを更新しながら、その都度自己選択・自己決定する過程だと捉える。本実践においては、「火事からくらしを守るために、だれが、どのようなはたらきをしているのか」について、自身の予想の基、消防署に対して調べる内容を自己選択し、調べ学習を進めていく。その結果、火災から人々を守るためには、消火だけではなく、防火も重要であり、地域の人々と助け合うことで防火や被害を抑えることに繋がると気付くだろう。そして、これらを含め、他の関係機関の取組や身近にある消防施設・設備について関心をもつに違いない。そこで、調べたいことを自分で選択し、調べ学習を行い、調べた結果を発表する。そして、最終的には、火事から暮らしを守るためにだれが、どのような働きをしているのか、根拠となる資料を選択しながら、自分なりの答えを決定していくことになる。

このように、子供は単元の中で何度も問いをもち、それについて調べたり話し合ったりすることを通して、自己選択・自己決定を繰り返していく。本実践の最後には、消防署や消防団の働き、関係機関や地域で協力し合うことの重要性を理解した後、「火災からくらしを守るために、自分には何ができるのか」を選択・判断し、決定していく。

社会科②〈公開授業 I〉

- 1. 授業者 牧田 健太郎
- 2. 単元名 長く続いた戦争と人々のくらし~わたしたちが戦争を繰り返さないためには~
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

② 対話を通して考えを見直し、社会的事象への理解を深めていく子供

本実践において、「他者とともに編む子供」とは、対話する中で、それまで自分がもっていた社会的事象への認識に見直しをかけ、更新していくことで理解を深めていく子供である。本実践では富山大空襲を経験した方や富山から戦地に赴いた軍人がどのような思いだったのかを考えるが、それぞれの子供によって、根拠にする資料や既習事項は異なる。そのため、考えの根拠となった資料を提示して発言するように促したり、発言する子供が大切にしている価値や言葉を板書に位置付けたりして、考えの背景が見えるようにする。また、友達の考えに納得し、新しい考えやより確かな考えをつくることができたことに実感をもつことができるように、何をきっかけにして、考えがどのように変わったのかを意識して振り返る時間を設けることで、考えの変容や深まりを実感できるようにする。

理科①〈公開授業 I〉

- 1. 授業者 山崎 裕文
- 2. 単元名 ものの温まり方
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

④ 事象と出合い、既習や生活経験との違いから内面が揺らぎ、追究を試みる

本実践で他者とともに編む場面は、内面が揺らぐ中で友達と関わりながら、新たな視点を取得し、物の温まり方の違いを捉える場面である。水が1つの容器に入っているのにも関わらず、温かい水と冷たい水が隔たり合っているという事象は、子供にとって大変不思議であり、金属の温まり方とは明らかに違う。「熱は温かいところから順番に伝わるものではないの?」と既習や素朴概念と照らし、内面が揺らいだ子供は、事象と深く関わりたいと追究意欲を高めていく。

そして、先述したように、操作しながら温かい水と冷たい水が混ざり合うときの様子を色の違う(温度の違う)水の動きに着目しながら見付けていく。注意深く観察することを繰り返し、温かい水と冷たい水が混ざらない状況と混ざり合う状況を比べる中で、「こういうときに、水は温まっていくんだ」と確証を得ていく。その過程を「他者と共に編む」と捉える。グループで実験を行う際、子供が自分の考えを他者と共感したり批判したりしながら、新しい視点を取得していくか着目したい。このような手立てが、他者と関わり自己を成長させる子供の育成につながると考える。

理科②〈公開授業Ⅱ〉

- 1. 授業者 保井 海太朗
- 2. 単元名 流れる水の働きと土地の変化
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 <u>④揺らぐ子供</u> ⑤承認、共感、認め合う子供

④ 教材と出合って揺らぎ、「どうして下流に土砂がこんなに積もっているの?」と問いをつくる子供

2つの教材を比較した子供は、これまで追究してきた流れる水の働きについての考え「川の水は、上流で土砂をけずり→下流へと運び→海の近くで積もらせる」だけでは天井川ができた理由をすぐさま説明できないため、子供は揺らぎ、問いをつくる。想定される様相は、①おどろきを感じる子供、②矛盾を感じる子供、③問いをつくる子供、④仮説を発想する子供、である。これら4つの様相は、学級全体で同時に見られると想定している。揺らいだ子供たちは今一度考えを安定させようと、互いのつぶやきを聞きながら、だんだんと問いを確かにし、納得できる仮説をもとうとするだろう。授業者は、つぶやきを聞き、①から順に言語化できるように促すことで、一人一人が考えを確かにし、他者と関わり自己を成長していけるようにする。

体育科①〈公開授業 I 〉

- 1. 授業者 齊藤 嵩之
- 2. 単元名 かくれおに ~オニと子のいたちごっこ~
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

④ 揺らぎから価値を編み直す

本実践における「他者とともに編む」は、"編み出す"、"編み直す"という2つの営みで表すことができる。ある集団において価値があると評されるとき、そこには合意形成が成されており、その集団は、他者とともに新たな価値を編み出したと言える。また、これまで自明とされてきた価値を一度解し、問い直すことは価値を編み直す営みである。すなわち、合意形成や価値の創造とは、他者とともに編み出すことと編み直すことの連続として捉えられる。

この編み出す、編み直す過程には、必ず「揺らぐ」瞬間が伴う。既存の枠組みや当たり前が揺らぐとき、子供は改めて行為の意味を捉え直し、新たな価値を模索し始める。この「揺らぎ」は偶然に任せるものではなく、教師が意図的に場を設定することができる。例えば、ゲームの様相を観察しながら教師が「鬼は全ての子を捕まえることが本当にいいの?」と問いかけることで、子供は既知の価値観が揺さぶられるだろう。その揺らぎをきっかけとして、子供はそれまで当然と思っていた試し合いの枠組みを疑い、ゲームの意味や目的を編み直そう(編み出そう)と、仲間とともに思考し始めるだろう。

また、例えば、ゴール近くであまり動かない鬼がいたとしても、「目的地への移動の阻止」という意味が共有されたとき、それは意味ある行為と見なされ、その集団内で価値が編み出されたことになると言える。以上のように細かな手立てではなく、「いたちごっこ」の様相が生まれるような問いの連続というシンプルな手立てが、子供に揺らぎを生み、「他者とともに編む」を活性化させるのである。

体育科②〈公開授業Ⅱ〉

- 1. 授業者 鳥山 大輔
- 2. 単元名 選ぶ!みがく!「作戦」で勝つ! ーフラッグフットボールー
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

② 身体をかけた試行錯誤を通して、攻め方や仲間の価値を見直す

本実践における「他者とともに編む」とは、作戦に必要感をもった子供が、チームで考えた(編む) 作戦を試し、その成否を基に動き方を見直し(ほどく)、再構成した(編み直す)作戦で運動に働きか ける営みを繰り返すことを指す。「チームの特徴に応じた作戦」とは、まさにチーム内の他者との関わ りの中で生まれるものであるが、作戦は相手によって通用度が変化するため、相手が変われば学びも多 様に変化する。相手を様々に変える中で、一度「よい作戦」として確立されたものが必ずしも通用しな い経験を重ねることで、考えをほどき、新たな作戦へと編み直していくのである。

仲間の性格や能力を踏まえ、得点に結び付く作戦の是非を振り返る過程では、実行性という視点から 自分たちに合った作戦を改善し、再構築する思考が集団内に働く。チームの特徴を把握していればこ そ、作戦の幅は見直すことで拡張し、実行性という観点から焦点化されていく。新たな攻め方を考える 過程は、対戦を踏まえて新たに見つかった課題に即した課題解決型学習となる。つまり、考えを見直す ことは、単なる修正の行為ではなく、チームの特徴を踏まえた作戦の実行性を高める学びであると言え る。

こうした営みは、多様な他者との関わりの中で新たな学びを生み出す姿そのものである。多様な他者との関わりの中で、考えを編み、ほどき、再び編み直す姿は、「自分のチームの特徴が分かること」と「相手に応じて作戦を工夫すること」の往還によってなされていく。「自分たちがどのように攻めると相手は思っているのか」を自分のチームの特徴や攻め方の傾向等を基に推測し、子供は作戦の組み立てを工夫していくだろう。同じ作戦でも「役割の変更」「実行のタイミングの考慮」「意外性のあるボール保持者の選択」等の工夫が再び得点につながることで、子供はその作戦に新たな価値を見いだす。新しい視点をもって作戦を扱ってみると、その実行性が高まっていく経験を通して、子供は攻め方や仲間の価値を見直していくだろう。だからこそ、多様な他者との関わりが欠かせない。このことを、多様な他者との試合を中心とする単元として構想し、自分のチームの特徴や攻め方の傾向等に着眼する機会を拡充する手立てによって支援していく。

道徳科〈公開授業I〉

- 1. 授業者 新保 拓実
- 2. 主題名 自ら考え判断し、行動しよう! 教材名 「みんなでデザイン!笑顔つなぐ幸せ広がる学校プロジェクト」
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

② 他者の思いに触れ、よりよい生き方を見直す子供

本実践における「他者とともに編む」とは、学校生活を支えてくれている人々や友達の行動に触れる中で、自分の思いや行動を見直し、学級や学校の一員としてよりよい在り方を見出していくことを指す。学校生活における子供の行動は、日々の出来事や周囲の反応を通して、自分の行動の意味や他者の思いの受け止め方が変わっていくものであり、「他者とともに学校を支える」という価値は、まさに他者との関わりの中で育まれる学びである。

本実践では、友達の行動や先生の言葉、学校を支える人々の思いに触れる過程で、子供は自分の行動の意味や他者との関わり方を見直していく。その中で子供は、「この人はどんな気持ちで行動したのだろう」「自分の思いは誰に届いているのだろう」と他者に思いを寄せるようになる。そして、感じ方や考え方の違い、共通点に気付きながら自分の考えを整理していく。さらに、友達や先生との対話を通して、「誰かのために」という思いが「みんなでよりよい学校をつくる」という共通の願いにつながっていることに気付く。こうして、感謝や敬愛の心を土台に、互いに協力し合おうとする気持ちが高まっていく。また、他者の思いや行動に触れる中で、自己の道徳的価値観を見つめ直すことは、他者との関わりを通して道徳的価値観を更新していく学びであるといえる。自分の考えを見直すことは、これまでの自分を否定することではなく、他者とつながりながら「よりよく生きようとする自分」を形成していくことにほかならない。

このように、本実践では、子供が他者の思いに共感しながら自分の考えをほどき、再び編み直していく。そして、友達や学校の人々の思いを受け取り、自分の行動の意味を問い直す過程を通して、「協力して学校を支えるとは、心を通わせながら学校をつくることだ」と捉え直していくだろう。こうした学びを支えるために、思いや行動の連なりを可視化するカードの整理活動や、心の変化チャートによる振り返り、友達と考え方や感じ方を交流する場を設定する。

外国語科〈公開授業Ⅱ〉

- 1. 授業者 桑山 賢司
 - ALT ロゼッタ 多喜
- 2. 単元名 6-2 (アンバサダー!推しの国の魅力を伝えよう 『Where do you want to go?』(光村図書 外国語『Here we go!』 6)
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

② 他者とともに繰り返し英語表現に触れることで、英語でコミュニケーションすることに ついての見方を見直す

最初の発表はペアになり"Where do you want to go?"と、発表者側の発話で始めることを条件とする。その後、写真動画に合わせて何を言うかは発表者次第である。先に表現を指導しないため、最初は十分に発話できずに止まってしまう子供が多くいると考えられる。今回用いる写真動画は一定時間で自動的に次に移る。すると、不完全な文だとしても思い切って発話する子が現れる。例えば修学旅行であれば、不十分な表現だとしても共通の体験が理解を助け、意味内容は伝わる。これをきっかけに、相手の発話の模倣から表現を獲得し自身も発話する。その繰り返しによって、表現は広がりをみせる。この活動を通して、言語材料の表現そのものに慣れるだけでなく、英語を使って話すことにも抵抗感が減るだろうと考える。また、振り返りを通して不十分な表現でも伝わる実感や自己の成長を実感することで、自己の英語でコミュニケーションすることについての見方を見直すだろう。

② 他者とともによりよいものを目指すことで、友達との関係を見直す

相手の表現を模倣する際や、振り返りでそのよさを伝える際に、関わった子供同士の関係に変化が生まれる。具体的には、表現を模倣する際にはその表現を既にしている相手に対する尊敬の情が生まれることが考えられる。よさを伝える子供は、相手に対する敬愛の情が芽生え、よさを伝えられた子供は伝えてくれた子供に対し好意的な感情を抱く。これが学習の中で繰り返し行われることで、双方が受容されていると感じ、より親和的で受容的なよい関係性へと繋がるだろうと考える。また、それは関係の作り方を学ぶ機会にもなる。子供は活動を通して互いの認識をよりよく見直すだろう。

学級活動〈公開授業Ⅱ〉

- 1. 授業者 新保 拓実
- 2. 題材 「あったかハートの学級になっているかな」 学級活動(2)イ よりよい人間関係の形成
- 3. 本実践における研究仮説

「他者とともに編む」子供の様相

①自己選択・自己決定する子供 ②見直す子供 ③求める子供 ④揺らぐ子供 ⑤承認、共感、認め合う子供

② 友達との関わり方を見直し、あったかハートを広げる子供

本実践における「他者とともに編む」とは、友達と力を合わせてあったかハートな学級を目指す中で、普段の自分の言動や友達との関わり方を見直し、その伝わり方や相手の感じ方を踏まえて、よりよい関係づくり自ら築いていこうとすることを指す。こうした学びは、他者との関わりの中で生まれるものである。

本実践では、これまでの「あったかハートを大きくするための取組」や日々の学校生活を通して、友達の思いや感じ方に気付き、「どんな言葉や態度が相手に温かく届くか」を考えていく。その過程で、互いの考え方や感じ方の違いを受け入れながら、学級の一員としての自覚を深め、友達とよりよい関係を築こうとする意欲を高めていく。こうした「温かな心を育てるには」という視点から他者と関わる中で、自分の言葉や行動のあり方を見直し、より温かな関係を生み出そうとする学びが展開される。